

シリーズ わがまちの文化財へ5

町史跡 光友の石畳

平成5年1月26日指定

下津田にある光友の石畳は、大永2年（1522年）に津田明神山城主、金築少輔七郎の家臣、中村宗太郎光重が築いたと伝えられています。

この道は三次往還の一部として、江戸時代の地図にも記載されています。津田から小国を超える約5kmにわたる坂道で、地下水位の比較的高い赤粘土層のため滑りやすく、石畳が築かれる前は難所のひとつとされていました。石畳の構築は、当時の交通網整備の一環であったと考えられます。

現在残る石畳は、ところどころ石がなくなっている部分があります。幅約1.5m～1.7mで、全長約120m。道の端に使われている石の端がきちんとそろえられており、築かれた当時の往来のようすを知ることができま



シリーズ わがまちの文化財へ6

町重文 大久保遺跡出土弥生土器

昭和55年6月16日指定

昭和22年に、東神崎良神社の土砂の中から発見されました。口縁部が一部かけているほかは、ほぼ完全な形での出土でした。

細い頸部、たまご形の胴部といった形は弥生時代中期の特徴です。また、櫛描文や列点文と呼ばれる模様が口縁部や胴部に施されているのもその時代の特徴のひとつです。櫛描文は瀬戸内から近畿地方で発生した模様と考えられており、弥生時代にその地方の人との交流があったことがうかがえます。

弥生時代の中期以降の土器は、町内はもとより県内でも数多く出土していますが、大久保遺跡から出土したものは「良式」とも呼ばれ、弥生時代中期中頃の広島県の土器の基準とされているものです。現在は大田庄歴史館に保管・展示されています。

